

この会社が目指す姿が理解できるか

島津製作所の統合報告書を読んだ一読し、「科学技術で社会に貢献する」ことを会社の進むべき道として、SDGsをもとにしたサステナビリティな社会を主な目標にしている会社であることが理解できた。この点では、この報告書は目指す姿が簡単に理解できると言える。しかし、昨今の企業はSDGsを目標に掲げる企業がほとんどであるため、簡単には理解できるものの、少し新鮮味にかけるかもしれない。ただ、そうした報告書の中にカーボンリサイクルや水素産業に関する自社の商品を効果的に挿入している点は目標を明確にしているため理解しやすくなっていて良い。

この会社の競争優位性が理解できるか

島津製作所は「社会を起点に研究課題までブレイクダウンするビジネスによって生み出される優位競争性」を人材力、技術開発力、幅広い顧客基盤にあるとしている。この競争優位性は容易に理解できる。この会社はセグメント別に計測機器事業、医療機器事業、産業機器事業、航空機器事業で主な売上を構成している。こうした構成から、島津製作所は医薬、医療、環境、エネルギー、半導体、素材などの幅広い分野の顧客を有しており、幅広い顧客基盤、また、それらに支持されていることから技術開発力については理解できるだろう。人材力に関してはグローバル化を進めていく中で海外グループ会社と協業する機会が増え、ルナ化に必要な異文化環境においてコミュニケーションやコラボレーションをするスキル、また、持続可能な社会に向けた技術革新が進展する中、社員の科学知識も必要となっているとして、従業員一人ひとりのキャリアの自立を目指している、と書かれている。更に2021年度には研修費として6億3千9百万円を用いていることから、人材力に関しても競争優位性があると理解できるだろう。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

人材力に関してはこれからも人財の育成に尽力していく研修を行うとしており、このことから、持続性が見られるだろう。技術開発力は様々な大学や企業と共同開発を行っていることを様々な場面でアピールしているため、最先端の研究を行っている感じがでて良いと思う。幅広い顧客基盤については73,74ページに顧客を満足させるための仕組みが書かれているため持続性が見られるのではないかと。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

2,3 番で言及したとおり、島津製作所は人財の育成に力を入れているとある。自分は文系であり、技術職は難しいかもしれないが、グローバルな人材を育成する、とも書かれているため、自身の人的資本の価値向上を見込める。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

この報告書には役員などの写真や実際に使用している写真しか載せていなかった。機密情報などがあり、難しいのかもしれないが、その機械や製品を实际制作している様子を載せても良かったのではないかと思う。島津製作所は一般向けに生産している商品は少なく、ほとんどが企業向けの製品である。そのため、一般人にとってはあまり身近な企業であるとは言えないだろう。このような事実があるのにも関わらず、社長や役員の写真し載せておらず、技術関連の会社というよりはそれらをまとめているだけの親会社であるという印象を受けた。島津製作所は島津一一株式会社という子会社を有していて、それらの会社の活動の現場についての写真があっても良かったのではないか。そうしたら多くの人にとって島津製作所についてもう身近に感じてもらえるのではないかと思った。また、細かい点ではあるが、人財という漢字と人材という漢字が同じような場面、例えば 7 ページと 65 ページのように同じ人ざいの育成について違う文字が使われているのが少し気になったため、直したほうがいいのかもしい。